

第64回 正倉院展 出陳宝物

奈良国立博物館

番号	所在倉	名称	略称	員数	初出陳
1	北倉	犀角杯（さいかくのつき）	犀の角のさかづき	1口	
2	北倉	花鳥背円鏡（かちょうはいのえんきょう）	花鳥文様の鏡	1面	
3	北倉	漆皮箱（しっぴばこ）	鏡の箱	1合	
4	南倉	銀平脱八稜形鏡箱（ぎんへいだっちはちりょうがたのかがみばこ）	鏡の箱	1合	
5	北倉	螺鈿紫檀琵琶（らでんしたんのびわ）	弦楽器	1面	
6	北倉	紅牙撥鏤撥（こうげばちるのばち）	染め象牙の琵琶の撥	1枚	
7	南倉	甘竹簫（かんちくのしょう）	管楽器	2口	
8	南倉	鉄方響（てつのほうきょう）	打楽器	9枚	
9	南倉	持笠半臂（もちがさのはんぴ）	板締め染めの胴着	1領	
10	南倉	錦襪（にしきのしとうず）	錦のくつした	1両	
11	北倉	木画紫檀双六局（もくがしたんのすごろくきょく）	双六盤	1基	
12	北倉	漆縁籐簾双六局龕（ぬりぶちきょじょのすごろくきょくのがん）	双六盤のいれもの	1合	
13	北倉	水精双六子（すいしょうのすごろくし）	水晶の双六の駒	6枚	
14	北倉	琥珀双六子（こはくのすごろくし）	琥珀の双六の駒	6枚	
15	北倉	黄瑠璃双六子（きるりのすごろくし）	ガラスの双六の駒	6枚	
16	北倉	藍色瑠璃双六子（あいいろるりのすごろくし）	ガラスの双六の駒	1枚	
17	北倉	浅緑瑠璃双六子（あさみどりるりのすごろくし）	ガラスの双六の駒	6枚	
18	北倉	緑瑠璃双六子（みどりるりのすごろくし）	ガラスの双六の駒	6枚	
19	北倉	双六子箱（すごろくしのはこ）	双六の駒の箱	1合	
20	北倉	双六頭（すごろくとう）	象牙の双六のさいころ	6隻	○
21	中倉	双六筒（すごろくのつつ）	さいころの振り筒	1口	
22	北倉	白碁子（しろのきし）	碁石	6枚	
23	北倉	黒碁子（くろのきし）	碁石	1枚	
24	北倉	斉衡三年雜財物実録（さいこうさんねんざつざいもつじつろく）	宝物点検の記録	1巻	
25	北倉	棚厨子（たなずし）	収納棚	1基	
26	中倉	瑠璃坏（るりのつき）	ガラスのさかづき	1口	
27	南倉	磁瓶（じへい）	二彩のかめ	1口	
28	北倉	丹（たん）	ガラスや釉薬の原料、絵の具	2裏	○
29	北倉	丹袋（たんのふくろ）	丹の袋	1口	○
30	中倉	瑠璃玉原料（るりだまのげんりょう）	ガラス玉の原料	一括	
31	中倉	雑色瑠璃（ざっしょくのるり）	色ガラスのねじり玉	21枚	
32	中倉	碧瑠璃（へきのるり）	緑ガラスのかざり玉	3枚	
33	中倉	雑色瑠璃（ざっしょくのるり）	色ガラスのトンボ玉	10枚	
34	中倉	碧瑠璃小尺（へきるりのしょうしゃく）・黄瑠璃小尺（きるりのしょうしゃく）	ガラスの腰かざり	各1枚	
35	中倉	斑犀小尺（はんさいのしょうしゃく）	犀の角の腰かざり	1枚	
36	中倉	雜帶（ざったい）	組みものの帯	1条	
37	中倉	紫檀螺鈿把斑犀鞘金銀莊刀子（したんらでんのつかはんさいのさやきんぎんそうのとうす）	小刀	1双	
38	中倉	沈香把鞘金銀花鳥絵金銀珠玉莊刀子（じんこうのつかさやきんぎんかちようえきんぎんしゅぎょそうのとうす）	小刀	1口	
39	中倉	水角把沈香鞘金銀山水絵金銀珠玉莊刀子（すいかのつかじんこうのさやきんぎんすいざんぎんしゅぎょそうのとうす）	小刀	1口	
40	南倉	紫地亀甲仏殿文錦（むらさききじっこうぶつでんもんのにしき）	仏殿文様の錦	2片	
41	南倉	紫地鳥獸連珠文錦（むらさきじちょうじゅうれんじゅもんのにしき）	鳥獸文様の錦	1片	
42	南倉	赤地鴛鴦唐草文錦大幡脚端飾（あかじおしとりからくさもんにしきのだいはんのかきゃくたなかざり）	幡の脚のかざり	1片	
43	北倉	紫地菱文綴錦（むらさきじひしもんつづれにしき）	綴れ織りの裂の残片	1片	
44	北倉	黄地花文夾纈綬（きじかもんきょうけちのあしぎぬ）	板締め染めの裂の残片	1片	○
45	南倉	黄布袍（きのぬののほう）	麻の上着	1領	
46	中倉	正倉院古文書正集（しょうそういんこもんじょせいしゅう） 第十巻	大倭国正税帳	1巻	
47	中倉	続修正倉院古文書（ぞくしゅうしょうそういこもんじょ） 第十五巻	大粮申請継文	1巻	
48	中倉	正倉院古文書正集（しょうそういんこもんじょせいしゅう） 第二十五巻	御野国山方郡三井田里戸籍	1巻	
49	中倉	東南院古文書（とうなんいんこもんじょ） 第三櫃第一巻	伊賀国玉滝仙券	1巻	
50	中倉	続修正倉院古文書別集（ぞくしゅうしょうそういこもんじょべっしゅう） 第四十七巻	優婆塞貢進文、角勝麻呂定過徴物文ほか	1巻	○
51	中倉	銅薫炉（どうのくんろ）	球形の香炉	1合	
52	南倉	金銅八曲長坏（こんどうのはつきよくちょうはい）	花形のさかづき	1口	
53	南倉	金銅小盤（こんどうのしょうばん）	花形の脚付き皿	1枚	
54	中倉	粉地彩絵几（ふんじさいえのき）	献物用の台	1基	
55	中倉	仮作黒柿長方几（げさくくろがきのちょうほうき）	献物用の台	1基	
56	中倉	密陀彩絵箱（みつださいえのはこ）	献物箱	1合	
57	南倉	紫檀金銀絵書几（したんきんぎんえのしょき）	書見台	1基	
58	中倉	書几残欠（しょきざんけつ）	書見台の残欠	一括	○
59	南倉	紫檀小架（したんのしょうか）	架け具	1基	
60	聖語藏	賢劫経（けんごうきょう） 巻第十一	隋経	1巻	○
61	聖語藏	諫王経（かんのうぎょう）	光明皇后御願経	1巻	○
62	聖語藏	大乘悲芬陀利経（だいじょうひふんだりきょう） 巻第四	称徳天皇勅願経	1巻	
63	中倉	続々修正倉院古文書（ぞくぞくしゅうしょうそういんこもんじょ） 第二十二帙第五巻	奉写一切経経師写経手実帳	1巻	
64	聖語藏	象腋経（ぞうえききょう）	今更一部一切経	1巻	○

EXHIBITION OF SHŌSŌ-IN TREASURES

第64回 正倉院展

ごあいさつ

本年の正倉院展には、9000件に及ぶ宝物の中から、北倉23件、中倉23件、南倉14件、聖語蔵4件の総計64件が出陳されます。奈良時代、東大寺大仏を造立し、人心を一つにまとめられようとされた聖武天皇、そのお后・光明皇后ゆかりの宝物をはじめ、天平の余薫を漂わせる鮮麗な宝物、1300年も昔に暮らした人々の息吹を伝える品々など、本年も正倉院宝物の輪郭をたどることのできる宝物が一堂に会します。また新たに宝庫を出て展覧に供される初出陳の品が9件ございます。

さて、本年注目されるのは聖武天皇・光明皇后ゆかりの北倉の宝物が多数出陳されることです。その中の一つである螺鈿紫檀琵琶は、律動的な唐草文様や白く輝く螺鈿が美しく、聖武天皇ご所持にふさわしい品格を備えております。またこの琵琶に附属する紅牙撥鏤撥は、象牙を赤く染めた地と白く彫り表された文様の対照が美しい品で、楽器類が撥に至るまで鮮やかに飾られていたことがわかります。そして、木画紫檀双六局をはじめ瑠璃や琥珀でできた色とりどりの双六の駒、象牙製の賽子からは、華やかなりし天平の遊びの姿が甦って参ります。

また本年は、瑠璃を用いた宝物が充実しているのも特色です。コバルトブルーが遠い異国を想起こさせる瑠璃坏、貴人の腰を飾った瑠璃製の小尺、大寺の伽藍の壮麗な様子を彷彿させる瑠璃玉の数々は、今なお輝きを失っておりません。

さらに、銀平脱八稜形鏡箱や銅薫炉のように生活の場を彩った調度品、紫檀金銀絵書几や紫檀小架など華やかに装飾された家什具からは、当時の暮らしが垣間見られます。

このほか、わが国に残る最古の戸籍の一つである御野国山方郡三井田里戸籍、近時の調査により新たな知見の得られた象腋経など、当時の生活や信仰を伝える文書・経巻も充実しております。

この機会に一年に一度の宝物との出会いを存分にお楽しみいただければ幸いです。

最後になりましたが、本展の開催にあたりご高配、ご協力を賜りました宮内庁正倉院事務所はじめ、関係者の皆様に、厚く御礼を申し上げます。

平成24年10月

奈良国立博物館長 湯山賢一

正倉院展をご覧になる前に

■正倉院とは？

奈良時代に、国、郡、大寺院などには「正倉」と呼ばれる倉庫が建てられ、穀物や種々の財物、道具類が納められました。正倉がいくつも集まった場所が「正倉院」です。現在私たちが正倉院と呼んでいる校倉の建物は、東大寺正倉院の正倉ですが、他の役所や寺院の正倉院がすべて長い歴史の中で失われたため、今日では正倉院は固有名詞として使われるようになりました。なお、正倉院は明治時代に東大寺から宮内省に管轄が移り、現在は宮内庁正倉院事務所の管理するところとなっています。

正倉院宝庫は東を正面とした南北に長い建造物です。内部は北倉、中倉、南倉の三部屋に分かれており、北倉と南倉は校倉造、中倉は断面が長方形の板を積み上げて壁とした板倉造です。近年行われた年輪年代測定調査によって、宝庫は741年から750年の間に建立されたと推定されています。

■正倉院宝物とは？

宝庫には約9000件の宝物が伝わっています。一口に正倉院宝物といっても、各宝物の由緒や伝来は実にさまざまです。宝物のうち中核と言うべき存在は、聖武天皇が亡くなった四十九日目である天平勝宝8歳（756）6月21日に、光明皇后が東大寺大仏に献納した聖武天皇のご遺愛品です。聖武天皇のご

遺愛品は北倉に納められています。このほか、天平勝宝4年（752）4月9日に行われた大仏開眼会において、皇族や貴族たちが大仏に献納した刀子や佩飾品、帯、数珠、ガラス器、銀器などを見ることができます。これらは主に中倉に納められています。また、大仏開眼会をはじめとする東大寺の法要で用いられた仏具類、楽器、楽舞の面や装束などが伝えられ、これらは主に南倉に保管されています。さらに、宝庫には宮中の年中行事で用いられた道具類のほか、武器・武具、文房具、遊戯具、飲食器、文書なども見られます。

宝物は聖武天皇の時代を中心に、奈良時代（8世紀）に製作されたものが大半を占めています。これに加えて、ササン朝ペルシア、中国・唐、朝鮮半島の統一新羅など、同時期のアジア諸国からもたらされた品も含まれています。

■正倉院展について

正倉院展は昭和21年（1946）に始まりました。奈良国立博物館での開催は今年で64回目ですが、東京国立博物館で開催された3回を含めれば67回目になります。正倉院宝庫は勅封によって厳重に守られ、古来行われた曝涼（虫干し）の伝統に則り毎年秋にのみ開封されます。正倉院展はこの期間に合わせて行われ、毎年約60～70件の宝物が出陳されます。

正倉院展

